

郷土資料 吞竜上人

第四二面史跡めぐり資料（一の割 吞竜上人）

越谷市郷土研究会

# 第四 二面史跡めぐり御案内

## 目次

一、とま 七月二十五日(日)午前十時

越谷駅集合

二、コース

越谷駅

一ノ割駅下車

真福寺

西福寺

一ノ割駅

三、会費

二〇〇円

交通費その他

尚、昼食は各自の用意ください

主催 越谷市郷土研究会

御案内

西福寺由緒記

吞龍上人の事跡

全 巻 伍

旧家青磁子太

新編武蔵國土記稿

吞龍上人説生地

佛後村と勝林寺本尊について

往 甘一〜五

一頁

二頁

三頁

五頁

七頁

八頁

十一頁

十三頁

# 吞龍上人御誕生地圓福寺由緒記

## 一 吞龍上人

県史跡天然記念地

春日部市観光協会指定

## 一 名祿

大河山華藏院たいかわさんけぞういん圓福寺

## 一 創立

承応年間（一六五二〜一六五四）三一九年前、徳川四代将軍家綱以前の創建といわれているが、其の後板碑の発掘により、九十六代の後醍醐天皇の元弘三年（一三三三）六三八年前より当寺が存在したことが判明した。

## 一 宝物 ○ 浄土曼陀羅彫刻厨子入

当山中兴光古尊恋和尚自作 文禄六年二月貳

拾日起刀 文禄十一年三月竣工す。

○ 釈迦涅槃像 厨子入

○ 閻魔王宮并百参拾六地獄像

当山中兴光古尊恋和尚 文禄十二年三月二十八日執刀 全十五年三月竣工す。

父は井上將監信貞 母は眞引なり 岩槻城主

太田十郎氏房に仕え 録五十貫を受く。氏房公

没落後 跡を民間に隠し一の割に住す。長男を

三茂左衛門と言ひ、上人は次男なり、天文拾壹

年寅歳八月拾五日の誕生なり、

茲に当寺住職 法善辨照上人の寺子に入り、

修學す。後祖父和尚について得度し 然る吞龍

と歎す。其の後太田大光院に住す。

昭和三年三月十五日 名僧吞龍上人生誕の地

として天然記念地に指定される。

○ 出典

「圓福寺住職さんの稿による」

春日部市一の割四二六番地

圓福寺

## 吞龍上人の事跡

吞龍上人の事跡は、浄土宗大辞典、徳川史記、太田大光院所藏文書等を詳細に調査探求を要しますが、その根柢たる入湯の地、群馬県太田市の大光院ではその資料の公開を得ないので、過去に出版されている諸書を考察し、その事跡の一端を記して見た。

浄土宗大辞典、画師日記、駿府政治録等は昭和三十五年度版、越谷市の史蹟と伝説にも記載されて活りますので、これを集録し、新編武蔵風土記稿、吞龍上人略伝所収転載し史稿とした。

吞龍上人は現春日部市一の割四六二の大河山華藏院四福寺（当時は井上氏の屋敷内）にて、天文十一年八月廿五日（一五四二）父を井上將監信貞母を近野と呼べる間に二男として生まれた。父は源姓であり信濃源氏井上掃部助頼季（頼信の弟）の末流であり、当時岩槻太田氏（太田美濃守資正）の家臣であり、一の割村五治貫文の地頭であった。

長子は三郎右衛門と称し家に在り、上人幼名を龍舟丸と称し、五才頃（天文十五年頃）初め市内大湯の光明寺に学び神童と呼ばれた。弘治元年四月二十五日（一五五五）同國の平方（越谷市平方）白龍山大善寺（林西寺の古刹）八右衛門の弟子と成る。弘治二年その學才を認められ江村芝ノ増上寺の親習画師の門に入る。（当時最高の学術）二十九才（元龜元年一五七〇）大善寺に帰り同寺の中興を成し、佛九世の首座なり、中興剛山をなす。師弟を多く教化す。

天正十九年（一五九一）上人五十才の萌林西寺（大善寺）寺領二十五石賜わり、四福寺にも寺領を賜わる。

文祿元年（一五九二）上人は一時近くの小字沖に一寺を建立し、引渡した様であり、平方沖前山月取院の項参照）

考察するに林西寺の末を新編武蔵風土記稿にて思うに末寺の崩山、中興剛山の徳が吞龍上人と師弟關係にあつた如くに見受けられる。

① 平方 崇源寺（明星山）本尊阿彌陀 中興、四善院表 元和二年三月寂（一六一六）

- ② 西楽寺（望徳山）崩山 炭釜没年不詳、中興崩山 誓巻三頁 万治二年三月癸（一六五九）
- ③ 月照院（沖前山）吞龍上人引禪の寺

備後

- ④ 衆明寺（一行山）崩山 一阿修得 中興
- ⑤ 勝林寺（稻荷山）中興崩山 勝蓮社退誓 吞龍上人に隨學す。寛永二年癸（一六三〇）
- ⑥ 遷到院 崩山欣誓（一六五八）
- ⑦ 眞福寺（西川山）崩山栄誓 慶長十九年十一月十三日癸（一六一四）

大畑

- ⑧ 西光寺（大畑山寂取院）

一ノ割

- ⑨ 田福寺（大河山華嚴院）崩山祖发 吞龍に

學び 承応元年癸（一六五二）

の如くである。

慶長十八年（一六一三）徳川家康公祖先の靈地上

野に義重山新田寺大光院を開基し、崩山和尚に吞龍

上人（七一）招請される。この間 久喜町に大畑（

春日部）に於いて、時を以て、小田原攻めの後のため

農地は被弊しており、農民の子を集め扶育し、手習

を教え子弟の感化に専し、その行は慈父、釈迦  
仏の如く次第に近郷の農民にも感銘を与え、同  
化し良民と成す。

現に三十代の近隣の成人の入道は、吞龍ツ子之  
受縁され、今に至つてゐる。

病弱の子秩堂を四月八日、釈尊誕生の日に四  
福寺に集め、譽の川の組立岡と釈迦涅槃尊を本  
堂に取出して絵岡による教化は日本託児所の最  
古と目されている。

その論版亦や岡縁、譽の川の組立岡が倉庫に  
赤コリに埋もれている。

現今宗教、信仰等を研として、何等かの目  
的にて探賈、保存出来ないものだらうか。

上人 元和九年八月九日（一六二三）八十一  
才にて示寂す。

以下別稿の緒文を参考照合をこころ。

## 吞龍上人畧伝

(其の一)

当時開山・諱は吞龍、字は然香、派蓮社と号す。谷姓は源氏、源氏は井上武敏、同前至郡一、割村の入なり。其の父を井上河内権貞と云ふ。乃ち太田道灌の家臣なり。主家滅亡の破一の割村に聊かの米地あるに依り此処に帰農し、二君に仕えずして永く閑隱居の風を慕つ。一日其妻「近野」龍神の社に詣ず。而して其夜一片の黒雲、同門より入るを夢む。而してそれより自ら身の重さを覚ゆ。夫徳貞之を悦べり。天文十一年、貞の年八月廿五日、難なく男子を生む。更或ち上人なり。二く三才の頃より人の念佛をするを窺ては完満として笑みを含み亦態自ら念佛し給う。天眞聰明にして兒戯群童に似ず、動靜殆ど大人の如し。宿因の悉らしむる所か。常に龍神の社に遊び、水石を以つて佛像に擬し土をむつて供具として楽しみ給う。宛も床祖大師の兒童たりし時の形状を髣髴せしめたり。十三才の春、忽然として出家の志を起し、切に在谷の形をまわい給えり。一夜宿夢を感じ、之を父母

に懇る。父母之をまさて大に欣喜し、而ちその出家を許して隣村平方村大善寺及并和尚の室に投ず。時に十四才弘治元年乙卯の春なり(一五五五)即ち四一六年前。後奈良天皇時代、ここに於いて始めて佛家の業を受く。「同一知千」の才、時の人舌を惹き羨を蒙じて疑を出す。世徳に恥じず、是れ八月得度して法名を吞龍と號す。該師後以謂、沈沙強非風の法相稀有の良材なり。撰索を以てほだすべまにあらず早く良師に値遇せしむるに如かず。十五才の夏より東京芝増上寺、親智圓師の下に孫錫せしむ。圓師深く其の俊才を美し、教諭他に畧りこの門弟にて學究の匪徒有を比ぶる者は無し。殊強積雪、年を重ねて卷まず、餅行益々高く道心益々深し。自証の密者を雲峯上人に化、他の秘蹟を再告上人に伝え給う。ハッて乘取神智増上寺の輪養の席に臨み玉い上人の精養妙法絶倫なるに驚きそれを稱歎し玉う。而してこれ以来州依殊に厚く、若干の眾を与え賜いて修學の費に充てしめ、祖先の追福の爲に当山を造營し、寺号を林西寺と改め上人をして開山たらしむ。

寂滅の如く果つて業を受け、遠近風を望みて

化を蒙る。後本神君の命に依り瀧山大善寺に移り、新田大光院へ臥す。句れも所山と縁せらる。

元和九年 亥八月九日 安然として示寂し給う。(元和九年は一六二三年にして三四八年前に当る)

天文十一年(一五四二年生誕)以来滿ハ一才示寂) 寿ハ十二才、嗚呼上人在世の化遙々冥に計り難し、或る時は惡姿を度して鬼を畏せしめ、或る時は罪入を匿して自ら苦に代り給う。当時の人、と人を以て生身の菩薩と爲し、滅後入冥の新願を満足せしめ玉うこと愈々精し。之に依つて偉敬する者、耳を經て益々多し。夫れ山高けれど見るごと遠く、深淵ければ流れ広し。上入行總の高き 總田の深き仰いで敬するべく、伏して敬すべし。

これは 版木に依り倒りあげられているので當時相当敬刷られ、徒者若しくは當時 閑深する人々に配布されたものであろうと思われる。

この畧伝は他にないので 當時を知る貴重な小冊冊子である。

(其の二)

市野町村 時持添新田

市野町村は江戸の里程、檢地前村に同じ、村内香取社の鶴口に一披目とあり、同社の縁起には市野目と書せり、之は文字を替え用ひしまでのことなるべけれど、今の如く唱えとなりしは何れの願よりのことなりや詳ならず。又かの縁起に太田十郎の家臣井上將監といへるもの当所を領せしよし見ゆ。將監の子孫連綿として今に村民に残れり、其茶 辨 見るべし。

民家八十五、東端後村、西は谷原新田、南は薄谷村、北は柏屋宿なり、東西十町、南北五町余、当所も前村と同じく元御料所に元後小笠原佐渡守に賜い、宝曆三年御料に復せり。外に大同十三郎が檢せし持添の新田あり。

※ 小名 み、やり

ここにもと「み、やり」といへる言き居ありし故、この名ありといへど詳ならず。

※ 堂宛

※ 新札場 東南の方にあり。

○ 香取社 村の鎮守にて四福寺あづかれり。

(香取社の鯛口)



村内にわすかの屋あり、当所にては其の名を借へざれど、粕壁宿の近くにては江曾堤と呼ぶ、此社古へ其堤上にありしを、前にいへる井上將監及び大弾正などいへるもの、力を合せ当所に引移せりと云。文祿元年圓福寺の住僧祖岌が書まし縁起あり、其畧に当所元新方領の心領寺にて、本地十一面觀音は行風之作なり。昔喜三郎末太郎といへる者奇異の靈叢を蒙り鯛口を寄進せり、又平方村林西寺中興の吞電和尚、立願せしに其靈驗ありしことなど、其こまと書き綴れど、させる証とすべきこともあらざれば其の要を摘てここに録す。鯛口の圖左の如し。

- 三島社 圓福寺持
- 稻荷社 同 持
- 圓福寺

淨土宗、平方村林西寺末 本尊阿彌陀、崩山祖岌は当郡の入にて滝山大善寺第三世 吞龍に經法し、承應元年示寂せし由、淨土鐫灯總○○系譜に見えた。

☒ 旧家者 弥平太

氏を井上と歿し先祖を將監と云、岩槻城主、太田十郎氏房に仕へ当所に於て、永五拾遺文を賜い、氏房没落の後 跡を民間にかくせり。男子二人あり、長男を三郎左匠門と云、次男を其十四才にして剃髮し、平方村林西寺に住居して感著吞龍と号し、後高徳の願えあり、三郎左匠門が子も又父の名を襲い、夫より建辨として当所に居住し、今の弥平太に至る。前に出せる香取社鯛口の本願末太郎といへるは、これが先祖なるべし。と云えど、其詳なることを知らず



新編武蔵風土記稿 卷の二〇六

埼玉県の南、新方領より所收

① 井上家は現在四福寺の門前の井上俊雄氏が当主である。

宅地構成は、北東部は旧利根川の古道に面し、西南部は種え田が寺殿部まで含み（現永田）ま礼に中世豪族の屋敷地としての遺構が見られる  
尚井上將監徳貞着用品と伝えられる其尾も近年まであり、筆者は昭和三十年頃拜見した。現在家作の立替を等に依り紛失した様である。

② 前掲の門口、戦後盗難にて現存しない。新方並記録の合石銘としては最古のものであつた。（享徳三年は一四五四年を五百十七年前のもの）

③ 圓福寺は上人誕生寺として朱印寺でもあるが度々の火災の為、書状は失っている。

④ 小名「みしやう」について古蹟にありと伝ふるも今はなく馬嶋菩薩（AD）養蚕の守護神であり中世において養蚕その收納のため建立されたのか、近くに青石出土す。

○ 平方村

平方村は江戸より行程八里、民家百八十五、南は稲渡、大沼の二村にて西は大枝、大畑、備後等の村々に接し、東北は古利根川を限り、川の向は吾師齋鋤子口、赤沼、藤塚の三村なり、東西二十町、南北十町許、御入国以来御料所なり用水及び検地の年代前村に莫ならず。

○ 高札場 北の方にあり。

小名 横手、南、東、沖、前、砂間、戸崎山谷

○ 古利根川 東北を流る。川市百町許、此川うちには村民私に渡せる渡船場二ヶ所あり、一は葛断瀬藤塚村に達じ、一は同瀬赤沼村に達す。

○ 春取社 村の鎮守 西光寺の持、下二社同じ未社 稻荷、荒神 稻荷社

○ 女體社 香取社（西栗寺持） 三島社（月照寺持） 鹿島社 湧田社（崇深寺持） 糸天社（村民持）

林西寺

浄土宗 京都智音院末白龍山

- 月照院と号す。本尊阿彌陀、惠心の作。兩山  
 普海成阿、示教の年代を伝えず、第九古然卷  
 吞龍大阿故信と号す。武州岩槻の入、井上氏  
 にて初めて列の平方林西寺の茂宗に授て剝梁  
 即其寺に住し、増上寺院獨國師に隨學し後藤  
 山大善寺に移り又工野回新田大光院に住し元  
 和九年八月九日ハ十餘才にて示寂と載せたり  
 当寺法の畧に吞龍は詔内市野割村井上將監と  
 云える者の二男にて笈宗に授じて剝梁し初め  
 は曇菴と号せしを後神君の上意を蒙り吞龍と  
 改めたりと。又何時の頃にや 神君の御前法  
 尚の時吞龍被薙なれば御感懐として學問の料  
 五拾石を賜はれり。この時より藤田流を改め  
 白旗流となり則ち今の如く智音院の本となる  
 由、後天正十九年廿五石の御朱印を賜われり  
 と。猶吞龍のことは市野割の民、井上氏の系  
 見るべし。今も御朱印廿五石なれば 綾野向  
 料は吞龍のみへ賜いしなるべし。
- 鐘樓 近年築造の鐘なり
- 二尊堂 地藏権音を安ず
- 林西寺の末、下二ヶ寺も同じ未なり。

明蓮山と号す。本尊阿彌陀、中興兩山山善友波、  
 元和二年三月示寂。

- 西葉寺 聖徳山と号す。兩山友善示教の年月を  
 失う。中興を善善三貞と称す。万治二年三月示寂

- 月照院 沖前山と号す。当寺は本寺古徳院建の  
 爲、文録元年建立せしと云う。因て既号本寺と同  
 じ

- 西光院 新義真言宗、尾ヶ岡村勝軍寺末如体山  
 と号す。本尊阿彌陀

- 西光寺 同宗 徳師詔赤沼村淨業寺末、稻荷山  
 と号す。本尊藥師を安ず

◎ 備後村

備後村は民家百四十余 南は大畑村、北は猪壁  
 宿、西は市野割村、東は古利根川を限り、川の向  
 は徳師御鏡子口、藤塚の西村なり、東西十二町、  
 南北十九町、日光街道村中を貫けり、御入田以來  
 御料所なりしを、元禄十一年村内を割て森川鎌三  
 郎、高木善之助、戸田勘兵衛等が先祖に賜はり、成  
 る延以兩村御代官所なり、檢地江戸の里敷江前村  
 に同じ。

- 高札場 二ヶ所 一は中程 一は須賀組にあ
- 小名 上組 中組 下組 須賀組
- 古利根川 村の東の方を流る。川巾四十五間

○ 香取社 村の鎮守 眞福寺持 末社 決間、

○ 兼天、稻荷、秋葉三峯稻荷合社

○ 稻荷社 二寺 一は勝林寺持 一は村民の持

○ 御徳社はも鎮守とす。村民の持 末社天神

○ 祿名寺 淨土宗 平方村林西寺末。一行山と

号す。用田一河修得 本尊阿弥陀

○ 勝林寺 本尊前に同じ。稻荷山と号す。中興

用山退答 寛永七年示寂す。伝燈系譜に勝

蓮社退答和尚吞竜に隨學し、後當寺を爾くと

記しこの外のこととはのせず、本尊阿弥陀

○ 還到應 是も同じ末、用山退答 万治元年示寂

本尊阿弥陀を奉ず 山号を本圖と云う。

○ 眞福寺 同末 西川山と号す。用山兼答慶長

十九年十一月十三日示寂 本尊阿弥陀。

○ 大日堂 村持

○ 眞節堂 眞福寺の持

○ 鶴音坊 祿名寺の持

◎ 大畑村

大畑村は江戸より里數七里半、当村も大畑村に属せしといえど分れし年代詳なる事を知りて、中民戸五十二、南は恩向村、北は備後村、東は大夜村、西は大場村にて東西五丁、南北十一町御入国以来御料所なりしが、正徳五年村内を劃いて岩瀬城主永井伊賀守に賜はり、其後盛暦六年上りて御料に復し、今は全く御代官所なり。檢世年代前村に同じ

○ 高札場 村の中程に在り。

○ 香取社 村の鎮守 村民の持

○ 雷電社 西光寺の持

○ 兼天社 村持

◎ 西光寺

淨土宗平方村林西寺末 大富山親取院と號す。本尊阿弥陀。

- 大日堂 村持り下同心
- 茶園堂

## 吞竜上人誕生地

### 圓福寺縁起

吞竜上人の誕生地は市内一の圓福寺山門脇の  
 現当主井上俊雄氏の家に父井上將監高貞（岩槻城  
 主太田美濃守資正の家臣）の二男として天文十一  
 年八月廿五日生まれた幼名を竜寺丸という。  
 （大陽光明寺）に入門した時は神童とたたえられ  
 た。永祿十二年春十四才の時、淨土宗白蓮山林西  
 寺（越谷市平方）第八世岷榮和尚の弟子となり、  
 元龜元年四月 十五才の時、岷榮和尚の推薦によ  
 り階上寺の学寮に入り（当時の最寄町）親智四  
 師の弟子となり修業し後、入浴して然著上人の教  
 導を拜受しました。

後年、徳川家康の御前法印にてその功、教を賞さ  
 れて学内料五十石を賜り、名を吞竜（前は圓通）  
 と改められました。慶長年間家康が祖先の新田義  
 重の追善供養のため（群馬県太田市金山）に義重

山新田寺天光院を祈山し、上人は紺山僧として招  
 かれました。寺跡については吞竜子尊で既に周  
 知の通りでありますので割愛させて置きます。

### 補後村と勝林寺本尊について

武里山学の裏にあり、一の割取又は武里聚  
 より十五分

原稿 写真 一景

入皇統八十四代順徳天皇の建曆元年（1111）春日部治部  
 少輔の建てられたもので、この箱形の本尊は十一  
 面観音であります。

當時は関東地方の半ばは海であり、城主治部少  
 輔の館は八木崎という渚の八幡山に在り、この渚  
 加原は海中の小島でありました。ところがこの島  
 から不思議な光がこうくとさし海中を照らす事  
 が一年にも及び、魚類は眩げてしまい漁夫は漁が  
 出来ず困り、城主に申し出たので城主はあちらこ  
 ちらと調査したところ、一本の枯れ木の朽ちた所  
 に観音の像がありましたので、不思議に思つて、  
 海中に持ち帰り、海中にまけて拜んでおりました。

或る時、この面の又ともわからぬ一人の僧がお城に来て施しを求めました。

門番はその僧が普隆の者でないのをさとり城主に告げ、城主はさつそく僧を禊いで尊像を拜ませました。すると僧はおどろいて、「この本尊は何処から持つて来つたのですか」と尋ねました。

城主は「あの須加島から現われたものであります」と答へ

僧は「不思議な事もあるものかな」と言つて避しんで三たび礼拝したので、城主はあやしんで其のわけを尋ねますと、「この本尊は唐の画から来つて来たものでありましょう。」と言つて次の様な話をいたしました。

「これは昔武法大師が唐の国へ渡り文殊菩薩の教を受けた時、法門契約のしるしに菩薩から授けられたもので、契約本尊と申し上げ、大師はその像をいたたま、昇朝後、備後の国へ安置しておきました。その後長い年月を経て、備後国は突乱がしきりにおこり、国中がおだやかでないので難をさけて東国へ移るものが多くありこの

像を安置しておりました。寺の人たちも像を奉じて船にのり、東国へ下りました。途中海が荒れて難破する船が数多くあつた中だ、この像を安置した船は全く無事で一人の事故もなく岸に着きました。皆んな不思議に思い「これは全く尊像のご利益だ」と尊像を拜み奉りうとする。怒ち可畏へともかく飛び去つてしまひ、所在がわからなくなつてしまひました。これはたしかその尊像にちがひありません。

今幾歳が熱してここに拜むことが出来ました。と言つて僧は涙を流して拜んで行きました。

その後ある夜、城主の夢枕に八十才位の老人があらわれ「我は船荷大明神である。あの島に社を建てよ。われは阿耨の守護とまらう」と言いました。

城主はおそれかしくこみ、この社を建てたと伝えられ、本尊は備後の画からお出になつたので村名を備後村と名付けたと言われます。

以上の文は元文六年、勝林寺廿三世浄土といふ人が古文書から口説されたものであります。

註

なお 本碑は現在も勝林寺に安置されております。

① 縁起書に記される治部少輔なる人物は

筆者の春日部氏の研究にては、春日部大征尉  
史高か。又は右征門尉史光の世代にあたる。

② 同春日部甲斐守史景 貞元元年(一二四三)

市内破山に稻荷社を勧請している。史景は史  
光の子である。主産物汝護の神たる稻荷社を  
勧請祭祀し、民心の安定と初夜策に尽力した  
る様子がうかがわれる。

③ 境内に大塚あり、その古木にゆどり木あり、

学名ヒスクムアルブンは、ポールテスケルス  
MAKINO と呼称す。植物学専攻野村博士の遺  
名であり、西塚にてはクリスマスマスの祝に飾る。

④ 近隣に南後に十三淨表碑三基、大塚に一基

が存する

⑤ 至近に新方領新地整理事業の功労者

原又右征門の墓所に顕徳碑がある。新方領  
新地整理は 当時有史以来最大の新地整理  
であり、幾多の苦難と苦悶が有り、今日、  
六十坪を越えずに忘れ去られようとして  
いることは誠に心痛の限りなり。

昭和四十六年七月廿五日

第四十二回史跡めぐり資料

越谷市郷土研究会理事

山石 井 茂